毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢



明治二十九年八月廿五日發兌

第八拾四號

口繪＝大磯海水浴（寫眞版）
社說＝平民的旅行
文藝＝鈴虫
プラスコピア　岡田紫樓
六代君（四）　其村子
下婢の居眠　一葉庵主人
入谷の牽牛花　桐栖舍女史
松田の緣（一）　中島筑山
富士山から飛び下る　山水生
家政＝小兒教育、小兒の食事、野菜、醬油、九月中の盆栽等
雜錄＝支那の婦人、文から集、すゞみ臺、日蝕の結果、美風ある小學校及生徒
歌苑＝募集歌

宮中御用全世界白粉之大王

有効無害

牡丹精（ぼたんせい）

◉牡丹精：は固有白粉と大に異り專ら皮膚の衞生に注目し西洋白粉をヘチマの水にてさらし麝香龍腦其他皮膚に特効を有する三四の藥劑にて製したる帝國未曾有の藥白粉也

◉牡丹精：は面部の肌理を緻密に潤澤にならしめ皮膚に光澤を賦はし、ひゞ、にきび、あせも、顏のあれ、ふきで等によく且發する事なく眞の白色美人となる妙なり

◉牡丹精：は宮中の御用を忝ふし第四回内國勸業博覽會に於て褒賞拜受の榮を忝し且つ内務省衞生試驗所に於て御試驗濟となりたる古今無比の藥白粉なり試に左に一二の例を掲げ參考に供す仍て本品の有効無害にして品位卓絶なるを知られよ



牡丹精を用ゆる人

水製煉製

特製御用品	七十五錢
甲號極大瓶	三十九錢
同 大瓶	十九錢
同 小瓶	七錢五厘
乙號 大瓶	十錢
同 小瓶	五錢
極大瓶	二十五錢
大瓶	十五錢
中瓶	十錢
小瓶	七錢五厘



普通白粉を用ゆる人

褒賞

牡丹精を第四回内國勸業博覽會へ出品せし所數多の出品中特に褒賞拜受の榮を忝ふす

御用

牡丹精を第三回貴婦人慈善會へ寄贈せし所高貴の御買上げの榮を忝ふし爾來御用品となれり

牡丹精を内務省衞生試驗所へ差出し定質分析衞生上害否の鑑定を願しに左表の如く好成績を得たり

檢查報告

東京市日本橋區横山町二丁目十三番地 依頼人 花王堂

第二百五號

化粧用水白粉(牡丹精) 一種

衞生上害否鑑定

本品ハ佳香ヲ有スル白色ノ合劑ニシテ之カ定質分析ヲ施行スルニ依頼人ヨリ現品ニ添テ出タル製法書ニ記載スル如ク舶來の粉〇〇〇〇〇〇〇〇涅要謨〇〇〇撒里矢爾酸、硼酸、麝香、樟腦、薔薇油、倔里設林〇〇〇〇ヲ以テ製シタル物ニメ他ニ有害物ヲ夾雜セザルヲ以テ衞生上無害品ナリトス

東京衞生試驗所所長

衞生試驗所技師 中濱東一郎 (印)

明治廿四年八月 檢查主任

衞生試驗所技手 平野猪之助 (印)

●但し本表中〇〇の部分は秘密を要する藥品に付詳出せす

◉製造發賣元 東京横山町二丁目 田中花王堂

關西代理店

大阪博勞町二丁目 玉村甚兵衞

大阪佐野屋橋 脇田盛眞堂

取次

全國至ル所和洋小間物店賣藥店ニ御坐候若無キ時ハ定價ノ外ニ郵送料六錢ヲ要ス

徳富猪一郎著

國民叢書

書名	定價	郵税
進步乎退步乎	十錢	二錢
人物管見	十五錢	二錢
青年と教育	十五錢	四錢
靜思餘錄	十五錢	四錢
文學斷片	十五錢	四錢
天然と人	二十錢	四錢
第二靜思餘錄	十錢	二錢
風雲漫錄	十五錢	四錢
家庭小訓	十二錢	二錢
經世小策 上卷	廿錢	四錢
經世小策 下卷	廿錢	四錢

書名	定價	郵税
第一國民小說	十五錢	四錢
第二國民小說	十五錢	六錢
第三國民小說	十五錢	四錢
第四國民小說	十五錢	四錢
第五國民小說	二十錢	四錢
第六國民小說	十五錢	四錢
第七國民小說	十五錢	四錢

新刊

第八國民小說

定價十五錢　郵税四錢

最も江湖に歡迎せらるゝ國民小說は左の六編を編纂したり
高麗陣博多聞書◎炭燒の煙◎老武者◎のろひの木◎初霞◎庖厨
一讀再繙興味盡きず消夏の好伴侶なり

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

明治廿九年八月廿五日發行
家庭雜誌第八拾四號

目録

口繪
大磯海水浴（寫眞版）

社説
平民的旅行……一

斷酒辨

史傳
ブラスコビア……岡田紫嬢……三

本年の八百屋物

文藝
六代君（四）……其村子……一七
下女の居眠……一栄庵主人……二二
大谷の牽牛花……桐廼舎女史……二四
鈴虫……石井かみ子……二五

魚類の直段

談叢
松田の緑……中島筑山……二七

歌苑

富士山から飛び下る……山水生……三〇

家政
一種の洋服

小兒教育に就て……三四
小兒に食せしむる心得……三五
野菜……三五
醤油のかびを防ぐ法……三六
九月中の盆栽……三六

雜録
支那の婦人……快哉生……三六
家庭時代……三七
結婚時代……三九
主婦時代……四〇
社會における勢力……四〇
文から集……俳諧堂主人……四一
水戸烈公が家臣へ送りしもの……四一
會津藩士より宮川家へ送りしもの……四三
一茶坊旅中より家へ送りしもの……四四
涼み臺……四四

小川一眞寫眞彫刻銅版及印刷



大磯海水浴

家庭雜誌第八拾四號
(明治廿九年八月廿五日發兌)

社説

平民的旅行

漫遊生

節は立秋に入りたれど、殘暑尙ほ甚烈にして、日中寒暖計九十度の間を往來す、炎塵千丈の裡に埋沒せらるゝ都人士は、各々思ひ〳〵に避暑旅行を企つ。

余も亦た避暑旅行を企て、今や上越の間なる清水越の絶頂にあり、因て此の文を草す、余は常に現今の所謂避暑旅行なるものゝ平凡なるを厭ふ、滊車に乘り瞬間にして避暑地に達し、旅館に止宿し、海水に浴し、温泉に浴し、瀧に浴し、期滿ち興盡くれば輙ち歸る、年々斯の如き事を繰返し、年々の避暑旅行となす、何ぞ趣味少なきの甚しき哉。海水も温泉も既に平凡となり、年々往くに從ひ、漸次に其の趣味の減却するは、其の避暑地の年々變化に乏しきがためなり。

人は最も變化を喜ぶ、旅にて面白く感ずるは見知らぬ事物に遭遇し、又變化の多きを見聞すればなり、避暑と共に新奇の事物に遭遇するの方法は、跋渉的旅行を以て最も善き方法となす。

跋渉的旅行を爲さんと欲せば、平民的の方針を取るべし、予や今や平民的旅行を實行しつゝあるなり、予は性來最も旅行を好み、旅行を試むること多けれど、曾て今回の如き愉快なる旅行を爲したることなし。

予は夏の海の趣味多きを慕ひ大抵每年海濱に二三週間の避暑を試むれども、亦夏の山にも趣味劣らざるを知り、今夏は北越地方へ漫遊せんと、高崎まで滊車の便を借り、これより徒歩にて利根川に沿ひ清水越を經て

信濃川を下らんことを期す。

平民的旅行は徒歩を主とするを以て成るべく手荷物の



多きを厭ひ、手荷物は必要品だけ、即ち小刀の如き、墨壺の如き、鉛筆の如き、用紙の如き、歯磨手拭等を一纒に包み、身にはシャツの上に浴衣一枚、脚絆草鞋かげにて頭には一蓋の編笠を戴くのみ、手にステッキを握れば洋傘を用ゆる要なく、雨ふれば足の止る處に一泊を期すればなり。

予は斯の如くにして出發せり、徒歩なれば勿論滊車の如く、馬車の如く、腕車の如く路はかどらねど、さして急ぐ旅にもあらず、五歩に杖を止め、十歩に脚を休むるも可なり、茶屋に休みては其の地の風俗人情を察し、道連に遇ひては種々の物語を聞く、見聞の益決して少々ならず、驕陽地を焚き炎熱堪え難き日中には、緑陰深き木蔭に荷物を投し、天鵞絨の如き軟草の上に長身を横へ、静に山光水色の美を觀す、其快言ふべからず、更に炎熱堪ゑ難きに至らば溪水の淺所を渉り、衣を脱して瀑布の落ち來るに投す、其快實に言ふべからず、予道中之を試み僅に瞬間にしてすべての勞苦を忘れ、此世界を忘れ、身は別世界にあるが如き心地せり、今倘ほ之を實行し、日々此極樂世界に入ることを樂めり。

此外平民的旅行の快樂悉く言ひ盡し易からず、唯に快樂多きのみならず、旅費の點に於ても非常の差なり、

汽車に乗り、腕車に乗りて旅館へ着するのみを快樂的旅行とするものは未だ旅行の眞味を解せざるものなり、快樂的旅行は平民的旅行に限る、殊に子男は眞に徒歩的旅行に限ると知るべし。

斷酒辨

（うつら衣）

もとより李杜か酒腸もなければ、上戸の目には下戸なりといへども、下戸なる人には上戸ともいはれて、酒に剛臆の座をわかてば、おのづからのむ人のかたにかすまへられて、南郭か竿をふきける程も思へは四十の年にもちかし、されば衆人みな酒臭しと世に鼻覆ひたる心はしらす、まして五十にして非を知りしさか、かしこきためしにはたくひも似す、近き比いたましう酒のあたりけるまゝに瓶にすむ虫と思ひたつ事ありて、試に一日の飲をたては身はなら柴の木下戸となりて、花のあした月の夕部かくてもあられけるものをと、はしめて夢のさめし心そする、けふより春の蝶の酔心をわすれ秋のもみちも茶の下にたきて、長く下戸の樂に老を待へし、さもあれ此誓ひみたらし川に御祓もせれば、たとへ八仙の一座なりともまれかは柳の青眼に交はり、吸物さかなは人よりもあらしておなし酔郷にあそふべくはいさ待の尾の山からすも、月にはもとのうかれ中まと思ふへし、

花あらは花の留守せん下戸ひとり

史談

プラスコビア

岡田紫櫻

「プラスコビア」の父は露國の陸軍大尉なりき、如何なる罪ありしやは知れざれど皇帝「ポール」第一世の命によりて「シベリヤ」に流刑に處せられ又露國政府は元來壓制的なれば從て疑念深く國家の安寧否な寧ろ其執る處の方針に對して危險なりと思はるゝ人物は悉く之れを「シベリヤ」の荒野に送るを常とせり犯罪者は凡て鎖にて繫かれ堀鑿の勞働に從事せしめられたり、されど國事犯の罪人は其家族と共に住するを許され、家族を

支給せんために少許の金を惠まれぬ、此惠與金にして若し不足ならんには或は農或は獵其他隨意の勞働によりて得たる金を以て之れに加ふるを得たり。今日に於ては流罪の不幸困苦は大に減ぜられ昔よりも多くの樂みも許可せられたり、尙ほ種々の困苦不便なきにあらねど貴族の如きは隨分寛慢なる生計を營むに足る程の金額を其歲入の內より支給せらるゝを得て實際勞働等をなす事はなし、夫れのみならず「シベリヤ」の首府なる「トボルスク」に「ポール」族の處刑人及び「ロシヤ」人の嫌疑のために流刑に處せられたるものとによりて組織せられたる文明の集會さへもあるなり。仁慈なる皇帝「アレキサンデル」第一世以前代々の皇帝の世にありては流刑に處せらるゝの苦みは中々今日の如き有樣にはあらざりき、實に「シベリヤ」に流さるゝは單に懷かしき古鄕の天を辭し戀しき友の前を退くのみならず文明社會の贅澤より無下の貧苦に陷り、寒氣甚だしく、冬は九ヶ月に渡りて此間數週日間太陽を見ざるの地獄に行くなりけり、大尉「ロボーロック」は終身流刑に處せられ「トボルスク」より遙か北方なる一寒村「イスキム」に住し、日々僅に拾「コペック」（壹「コペック」は我一錢に足らず）の金を受けしのみなりき、其妻と當時僅に三歲なりし其娘とは彼れに從ひぬ、妻は堅忍自ら其位地に堪へて前には下男下婢に任せたりし凡ての家庭の辛き働きに服したりしが、幼なかりし「プラスコビア」も今はやうやう生長して只に其母を助くるのみならず出でゝ裸麥の收穫に村人を助け其賃として少し許りの裸麥の束を得るに至りぬ、彼女は其十五才のとき、父が如何なる不幸の境にあるやを悟り初めしまでは此荒寥たる家庭、此深雪の眞中、此凍寒、此長き暗黑の中にあるも尙ほ甚だ幸なりし也、此頃父は一官吏の手を經て「シベリヤ」の知事に其放免を嘆願して答を待ち居しが「トボルスク」より使者の來る度每に失望の

みうちつゝきしかば、父は其娘の無教育にして成長し最も下等なる奴婢のなすべき勞働に服事するを見るに付けて己が命運の拙きを嗟きつゝ「プラスコビア」にも餘りに善き顏のみは見せざりけり、父の失望は「プラスコビア」を其小供らしき遊戯より脱せしめぬ、彼女は日每大能なる天神に其父の放免せられて怏々たる心の一日も早く安らかならん事を祈願せり或時彼女は例の如くに祈りしけるほどに、「ピートルスボルク」に行きて父の赦免を請ふべしとの默示を受けしが如き心地して、夫れより後は近隣なる松林の中に行きて神の惠を乞ふなど如何にもして父の赦しを得んと長らくの間此思ひにのみ耽り居けるが、元より輕々ならぬ企てにしあれば彼女は容易に此事を人々に語り出でず日をのみ重ねけり。一日彼女は此大企を父に語らんと心を定めて勇ましく父の前に進みしかど流石に言ひ出づる能はず、其後もかゝる事に幾度となく胸とゝろかしぬ、年も漸く移り行く程に斯くてあるべしやはと彼女も今身の勇氣を皷し、恐れなく思ふ處を父に告ぐべき日を定めけり、程なく定めの日も來ければ朝まだきより例の森に至り神に祈りて大能の力の其企の上にあり且つ父も大に此擧を贊成して「ピートルスボルグ」への出立を許しくるゝ樣願ひたり、されど祈は聞かれざりしか父は「プラスコビア」の言を聞き終りて只默然、其妻を呼んで「余は善き救の女神を得ぬ、娘は吾等のために皇帝に乞ふ處あらんとて「ピートルスボルク」に出立するとよ」と云ひ、續ひて彼女が動悸高き胸より出し其熱き企ての委細をばわざ笑ふが如き最と冷かなる口調もて物語れり、妻も「能くこそ、斯かる痴言云はんより其仕事をするこそ彼女のつとめなれ」と答へぬ、怒りと云ふよりも寧ろ失望を以て充されたる「プラスコビア」は前後も打ち忘れて泣き入りけり、されど母は「是非にとなれば勝手に「ピートルスボルグ」に出立す

るもよけれどやがて晝飯なれば先づ膳の掃除をなし置くべしと」云ひつゝ手巾を渡しゝのみ。是れにもこりず「プラスコピア」は毎日父に出立の許を與へられん事を乞ひ、若し其許は得られずとも此大企圖に付て一考をダニト熱心に請ひ終に父の怒に觸れて此事に付ては再び云ふ勿れとまで命ぜらるゝに至りぬ、彼女も此處に到つては殆んど失望せり、然れども未だ絶望迄には程遠く、此後三年の間祈りの毎度に父の許を得せしめ玉へと唱へざるとはなかりき、此長き三年の間は如何に彼女の身には苦しかりしが、其願ひの許されざるのみならず、母さへ病の床にありて彼女が物思ひの種を増しぬ、然れども「プラスコピア」が看病婦として且つは主婦としての此間の苦心盡力は父母をして最早彼女を一童女と見ず、彼女が再び其大企圖を持出せし時には以前の如く嘲笑などの事はなくて却て彼女が企ては善からんも、老年將に死なんばかりの父母を見すてゝ遠き旅路に出で立たざらんとを請求するに至らしめたり、彼女は父母が己が身をかくまでに頼もしむかと聞いて涙にむせびしが、尚ほ其大願望は之れを中止する能はざりき。今は第二の困難こそ起りけれ、之れ別事ならず假令父の許は得たりとも、旅行劵なくば如何で彼女は「イスキム」の外に出で得べき、彼女は旅行劵を得んがために父に乞ひて「トボルスク」なる知事の許に請願書を出せり、されど無益なりき、百方其術を盡して到らざる處なかりしに凡て無果なりき、彼女は如何にせばやと案ずるのみなりしが幸にさる人の手續にて父こそ罪人なれ彼女自身は少しも罪なければ何時なりとも「シベリヤ」の外に旅行するを得べしとの許しを得るに至れり彼女が此時の嬉び如何なりし⁉ァ、されど父は云へり「余は初めより旅行劵の得べからざるを計りて出立を許せしのみ、如何でか十八才の一少女を斯る遠き旅路に手放すの心あらんや」、彼女が失望果た如

何なりし、あゝ「プラスコビア」が此時の驚は果た如何なりし!! 彼女が堅き心は尚ほ屈せざりき終に父も母も出立を許すに至りぬ、然れども父は「プラスコビア」が其餘りに大膽なるを戒めたり、「シベリヤ」に於て父に請願する如く能く容易に皇帝の面前に於て言を發し得るや、否や、番兵は嚴格に門を閉ぢて汝を入れざるべし、其時に於ては家なく、衣なく、食なきの憐れなる漂蕩見こそならめなど威せしかど「プラスコビア」は少しも意に介せず、愈よ其年の九月八日を以て其出立の日と定むるに至りぬ。

「プラスコビア」は早天床を出で旅裝を調へて（旅裝とて別に荷物あるにもあらず、只一つの袋を肩に掛けしのみ）將に家を出でんとするに當り、父は其時貯へ居たりし凡ての金即ち僅に銀貨一「ルーブル」（一「ルーブル」は百「コペック」なり）を與へんとせしに一「ルーブル」にてとても「ピートルスボルグ」まで達す可くもあらず、之れなくもあるも同じく人に依らざる可からざるの身、然れど此金にして若し家にあらんには大に父母の助ともなりなんとて受けざりしを父が強ての勸めに終に受取ぬ、又父と同じく流刑に處せられて此村に住へる人々の中にも殊に彼女が孝心に感ぜし二人のものは強て彼女に送るに銅貨三十「コペック」及び銀貨二十「コペック」を以てせり、されば「プラスコビア」も其心切に感じ、若し父を救ふを得たらんには此人々をも如何で救はずば置かじと心の中に誓へり、かくて旭の第一の光線が室の隅々に行き渡りける頃には當時「ロシヤ」の美風として旅人のために祈あり、暫時熱情溢るゝの會話ありて、終に訣別の時は來れり、「プラスコビア」は跪きて兩親の祝の詞を戴き、今や其遠き旅路に向ひぬ、あゝ、花をも耻かしむるてふ十九歳の少女僅に二「ルーブル」を懷にして遠く「ピートルスボルグ」を指して急ぐなりけり、村人等に見送られて勇ましき道を進み初めしが、次の村

まで來りし時には最早日も西の山に入りはてし頃なりき、此夜此村に宿りつ、二日目には昨日の疲勞甚だしきには拘はらず、勇を皷して苦しき山路を辿りけり、時々は道を迷ひて夕日さす時には朝まだき出立せし村に歸るなどの事も度々なりき、又或時は淋しき山中に迷ひ入り、恐る恐る樵夫に「ビートルスボルグ」への道を問ひて空しく笑はれたる事もありけり、或日彼女は三辻に來かゝりければ何れに行くべきかと思案にくれ居けるに丁度車夫の通りければ「キーユ(「キーユ」は「ビートルスボルグ」への道に當れる著名の都會なり)へは何れの道より行くべきかを問ひしに車夫は微笑して「三ツの道の中何れをなりともとらるべし、何れよりするも皆な「キーフ」、「パリス」、及び「ローマ」に至るを得べし」と最と怪しき答をなしければ「プラスコビア」も殆んど迷惑せしが、終に意を決して中間の道を取りぬ、而して幸にして此道は正しき道なりしが、斯かる事も度々なりし故、後彼女が「ビートルスボルグ」に着せしとき如何なる村々を經過せしやを記臆する能はざりき、又或時は途中大雨に遇ひたることも數度ありぬ、山中の寒村に於ては彼女は常に好遇せられしも少しく大なる町に於ては常に惡婦、乞食と見なされて逆待せられけり、或日「カムーイチフ」の近傍にて烈しき暴風に出遇ひ道側なる森に入りて暫し避くるを得しが、其の中に夜影は來けれど嵐は益烈しくて雨さへも加はり衣は襦袢までも濕りたれど爲すすべもなく、夜の明くるを待ちて道に出で漸く村の中程に出でしに、其衣は只に雨にてじたじたとなりしのみならず泥さへ多く付着し居りければ誰一人ありて彼女を世話するものはなかりき、「プラスコビア」自身も己が衣の汚れたるを耻ぢて流石に小奇麗なる家には得行き兼つ、小さき煮賣店などに行きて憫れみを求むるのみなりければ却て憐れと思はるゝ事はなかりけり、彼女今は教會に

行かばとても逐ひ拂はるゝ事はなからじと思ひしが不幸にも敎會堂の戸は鎖され居りたり、彼女は犬の吠ゆるも、小供等の來りて乞食、盜などゝ罵るをも意とせず、饑と寒さに迫られて、心中專一に大能の神に祈りつゝ、戸の開かるゝを待ち居たり、暫時の後一婦人群集の間より顯はれ出でゝ最と心切に彼女に委細を問ひぬ、「ブラスコビア」は森に於ける恐ろしき樣の事など漏さず物語り、巡査に其旅行劵を示しければ彼女が身分の程も分りて、婦人は彼女を己が家に連れ歸らんとて丁寧に其身を起しやれば「ブラスコビア」は靴の片足を失ひて足の指は氷に包まれ居ければ元より感覺は全く無かりけり、村人等も今は其不心切なりしを悔ひ恥ぢ、彼婦人を助けて其家に彼女を連れ行けり、此婦人は心切の下に其家に止まると數日身躰の疲勞も全く失せければ再び旅路に出で立つ事となりしかば村の人々より深靴一足を送り呉れぬ、「ピートルスボルグ」迄の前途尙ほ遠く、其將に出遇べき困難を思ひては殆んど絶望せざる可からざるの境にあり乍ら元より大望を抱ける身の彼女は少しも撓むとなく、足力のつゞかん限りに進めけり、彼女は亂りに憐れみを乞はず、又其身の哀れなる境遇をも好んで人に語る等の事はなかりき、人若し彼女を憐んで金錢など與ふるときは必ず之れに報ゆるに日頃より習ひ覺へたる作業を以てせり、即ち洗濯、掃除などは彼女が通常恩人のためになせし勞働なりしなり、之等の事を以て見るも彼女は已に凡ならず、其意志如何に强かりしか、其精神如何に高尙なりしかを察するに餘あり、彼女或時は盜の家に誤り宿りて深夜、僅に銅貨八十(コペック)を容れたる財布を探られし事もあり、或は野宿して狐に苦しめられ、或は早朝出立して、犬に怪まるゝ等凡ての困苦嘗め盡せしが就中最も吾人の注意を引くに足るべきものありけり。さなきだに師走の空寒きを、一週間此のかたの

大雪暴風に道塞りて進むべくもあらず、殘念ながら「プラスコビア」は暫く旅行を見合すに至り又數日の後道は未だ善からねど彼女は敢て出立せんとせしが、村の父老たちは雪崩、吹雪の恐しき事を說きて彼女を止め、且つ心切に、「クリスマス」の宴會の馳走を用意せんために近日「エカタリンエンボルグ」に向て出發する馬車あれば夫れに乘りて行くべき樣すゝめ又彼女は幸にして此馬車に乘ずるを得しが其衣服寒中の旅行に適せざりし故、「カールスチナ」と云へる處に來ける時には寒氣烈しく、羊皮の上衣を得るにあらざれば到底凍死を免れざる程なりき、されど元より彼女に此高價なる羊皮を購ふに足るべきの貯へなく、なさん方盡きて困し果て居けるが、車中の人々も氣毒に思ひ少しづゝ寄附をなして漸く一羊皮を買ふ程の金を作り、急ぎ村に行きて之れを求めしが、幾何の代價を拂ふとも羊皮を賣らんと云ふものなかりけり、於此車中の一人己が皮衣を脫して「プラスコビア」に着せしめ、己れは人々のを代はる代はるに借りて着んと云ふものあり、人皆之れに同意しければ、彼女は身體の寒さは最早覺へざりしが、精神上に於ては以前よりも一層甚だしき寒さを覺へぬ。「エカタリンエンボルグ」に着して或る旅舍に投じぬ、宿の主婦は最と心切に彼女を待遇し、且つ此處にて慈善家の聞へ高き「ミリン」女史なる人あるとを告げぬ、「プラスコビア」は明日女史の宅を訪ひて救を求んと決心し、此日は日曜日なりしかば教會に行けるに、彼女が怪しき姿と其信仰の强きとは殊に人々の注意を引けり、一婦人彼女の名を問ふものあり、此婦人と種々談話したる後、案内せられて「ミリン」女史の宅に至るを得ぬ、女史は「プラスコビア」を憫れと思ふと甚だ切に、其冬は一人の珍客として彼女を待遇し、去る嵐の夜の害傷の一日も早く癒えんとを祈れり、「プラスコビア」は最と平和なる日を送りつゝ大に「ミ

リン」女史の恩愛に感じけるが、夫れに付けても彼の「シベリヤ」の荒野の深雪の中にありて苦難し給ふ父母は、など〻思ひつゞけて得も堪へ難く、如何で早く都に上り、父母を救ふを得ばやとのみ思案に耽けりけり、されど女史は彼女の出立を許さず、種々文明的の學藝技術などを敎へぬ、されば彼女も止むなく、終に明春迄女史の家に止まりき。春ともなりぬれば、「ボルガ」河の支流なる「カーマ」河を漕ぎ行く端舟の中に女史は彼女のために殊に坐を設けしめしのみならず、鹽と鐵との荷物をもちて「ニシニー、ノブゴーロッド」と云へる處に行く商人に彼女の身上を托し、溢るゝの情を以て離別したり、不幸にも此商人は病にかゝりて「カーマ」河岸のとある小村に止まらざる可からざるに至りければ「プラスコビア」は再び保護者なき旅路の少女となりぬ、「ボルガ」河を上る時端舟は馬に引かせありければ船頭舟を岸に撞突させじとする途端「プラスコビア」と二人の旅人とは水中に突き落され、直ちに助け上げられしかば命は拾ひ得しも、元よりの事衣は全くじたじたとなりぬ、之れを脱がでは叶はざるべきに女の身の人前にて裸躰となる譯にも行かず、さりとて小舟のことなれば、密室とも云ふべきものなく、忍びて其まゝになし置きければ、さなくさへ以前よりの疲勞もあるに愈よ心地惡くなりぬ、又「ミリン」女史は彼の商人を信用して「プラスコビア」を托せしとなれば彼女には別に「ノブゴーロッド」の樣子なども告げず、行く先き先きの知人への照會狀をも與へざりし故彼女の困苦は思ひやるに餘りありしならん、船頭は普通の上陸場に彼女を上陸せしめぬ、丁度其近邊に敎會堂ありしかば、兼て宿屋に行きて拒絶せらるゝの恐れもあるとて、直ちに其敎會堂に行きて尼に一夜の宿りを乞ひぬ、初めのほどは尼も此寺院にては旅人を宿さず只少しの金のみは惠むべきよしを告げけるが「プラスコビ

ア」が切なる願と其愛らしく憫れなる態度に打たれて終に一夜を此寺に明すを許せり、然るに其夜彼女が身の上話を聞き、「ミリン」女史の惠を聞き、「ボルガ」河の危難と其後の身躰の不健康なることを聞ひては流石は慈惠の尼、如何で身躰の健全となる迄は此寺に止まらるべしと云ふに至りぬ、「プラスコビア」も心は急げど眞に躰も弱り居り又尼の心切を無にするも如何しく思ひければ、心ならずも數日間此處に止まることとなりけるに、其數日間も漸く盡きなんとするとき、彼女は重き病に犯されぬ、醫師も此病は到底全治すまじと許り云ふに至りしが、彼女は獨り自ら其病の本復すべきを信じて疑はず、神は必ずや其仕事を成就せしめ給ふべしと云へり、果せる哉、夏も過ぐる頃漸々快方に趣きたり、されど病後の身、轟き渡る車にての旅は叶はず、橇に適するの道を待つのみなりけり、終に橇を得しかば「モスコー」に向て出發せり、尼は「モスコー」なる一貴女に添書を送りて彼女の身上を依托しぬ、貴女最と心切に彼女を待遇し「ピートルスボルグ」へ歸る商人に彼女を托し、添書をさへも與へて或内親王の許に送れり、斯くて「プラスコビア」は「シベリヤ」なる父の家を出でしより以來十八ケ月、終に目的の地に達するを得たり。

商人は彼女を其家に宿らしめ、心切至らざるなかりしが、未だ彼女を内親王に照會し得ざりしに急用ありて「リガ」に行きぬ、妻も情け深き人なりしが自ら進んで「プラスコビア」のために充分盡力する能はず、彼女をば兼て慈悲の名高き一女史に照會せんとせしが同女史の家は水を渡りて彼方なる「チベ」にありしに、丁度此時は冬の二月、氷は水を閉ぢて、最と危險なりしかば誰一人だに「チベ」に渡るを許されざりし也、此商人の家を訪ひし一客の勸めに從ひ彼女は十四日間每日「セナート」議院の入口に立ちて、議員らしき人に遇ふ毎

に父の罪に對する裁判今一度改められたしてふ請願書を出せしが、或時は罵られ、或時は突き倒され、又或時は乞食と見誤られて小錢を投げ與へらるゝのみにて、彼女の請を聞くものはなかりき、彼女も大に失望せしが、尙ほ幾分の否な寧ろ熱心なる望を將來に屬しつゝ待ち居けるが、やがて基督復活祭も來りぬ、此日は「プラスコビア」も凡て身の苦み心の歎きを忘れて最とゞ心地よげに、己が恩人なる商人の妻と共に小車にて「ピートルスボルグ」の町々に遊びけるに圖らずも「子バ」への船橋の開かれたるを見しかば、彼等二人の喜びは云ん方なく、待ちに待ちにし事なれば直ちに彼の女史の家を訪ひしに其時丁度女史は在宅にて丁寧に彼女を受け入れ、其の話の委細を聞て且つ驚き且つ憫み、「セ子ート」には隨分善き官に女史の知人あれば其人に依賴せば萬事都合好かるべけれど少し都合ありて今直ぐには其事も出來兼るよしを告げぬ、然るに此日は復活祭なりし故其祝を述べんとにや丁度暇なし居たりし紳士、女史を訪問せしかば、女史は之れを天の與へし幸となし、挨拶終るや否や「プラスコビア」を照會して萬事を依賴せしに、同紳士も實に憫れなるとと思ひ、暫時考へて「セ子ート」に請願するは却てよからず、假令裁判は今一度改竄せらるゝとも其結果を見るは近からざるべく、且つ裁判は如何に終結するやも知れざれば、仁慈なる「アレキサンデル」帝の惠みを願ふ方遙によからんと告げぬ、「プラスコビア」は大に望の燭を得て商人の家に歸りたり、後數日商人も「リガ」より歸りたり、されど彼女が目的の如何ばかりも成就し居らざるを聞て大に心痛し、彼女をば直ちに彼の內親王の許に伴ひ、內親王は喜んで彼女の世話を承諾せり、此內親王と云は其性質甚だ慈悲深き老婦人なりしが、其家には常に多くの客ありて、加留太遊び等のみに耽る人々のみなりしかば、主人も客も共に此少女の事は

忘れたるが如くなりき、されば「プラスコビア」も多少失望せざる能はざりき。斯く失望したる彼女も當時「メリー」太后の大夫たりしMV氏に己が願を提出すべきを嘗て或人より勧められたるとのありしを思ひ起して聊か慰めを得たり、即ち彼女は大夫の家を訪ひぬ、大夫は彼女は貧乏のために苦み居るものと誤解して、最と不憫に思ひ、五十「ルーブルス」の金を出して彼女に與へしめぬ、其後「プラスコビア」が大夫の家を訪ひし時丁度主人は不在なりしが、夫人は彼女に應接し、其話を聞て甚く感動し、MV氏の歸宅を待たしめたり、MV氏歸り來り、親しく彼女と談話して其實際の様子を知り、直ちに皇太后の許に至り、即夜皇太后は彼女に拜謁の榮を給ふべしとの報を持ち歸りぬ、可憐の少女は餘りの欣しさに顔色を失ひ、眼に涙をたゝへて厚くMV氏夫妻に泣謝せり。「プラスコビア」は最早其衣服の事に注意するの暇を有せず、朝儀の如何も亦顧みる能はず其全心は只其唯一の大目的を以て包まれけり、彼女は王宮の門前に立ちし時「ヲー今若し此處に父上の居まさんには如何ばかりか快び給ふらん、皇天の妾に幸し給ふも亦極まれり」と叫べり、「メリー」皇太后は彼女を其私室に引き、親しく其語る處を聞きて、其獻身的行爲、其父に對する愛情の切なるを賞與し、畏くも身自ら彼女に代りて皇帝に歎願すべしと約束し給ひぬ、夫れのみならず又彼女が差し當りての欠乏を補はんとて金三百「ルーブルス」を惠與し給へり、「プラスコビア」は大に皇太后の恩施に感じ、V氏夫人が拜謁の様子を尋ねし時は只泣く許りにて答をなす能はざりしと云ふ。二日の後皇太后は身自ら「プラスコビア」を伴ひて、皇帝及び「エリザヘス」皇后の私室に行き給ひき、此會合に於て如何なる談話ありしやは吾人の知る能はざる處なれども兎に角「プラスコビア」は金五千「ルーブルス」の賜と父の罪に對する裁判は直ちに改議

せらるべしとの約束とを得て退りけり、於是乎今まで彼女に對して不心切なりし輩徒らに其甘心を求め媚を呈するを勉むるに至りぬ、されど彼女は元より確乎として彼輩が誘引には應ずるなかりき、或日二人の貴女に案内せられて王宮を拜するヿありしが、彼女は御座の前に立ちし時聲を震はし頭を振りて、非常なる感動を表示せり。彼女は「シベリヤ」なる二人の流罪人を忘却する能はず、常に人々に彼等がヿを告げゝれば、人々は未だ父の罪さへ許されしにはあらぬを他人のヿまで言ひて裁判の結果を惡くする勿れと忠告せり、されど數月の後彼女が父は已に無罪と見なされ、皇帝陛下は「プラスコビア」が何事にても彼女自身のヿに付て願望を有せば聞かまほしと宣玉ふと聞きし時彼女は、「陛下よ陛下が父に與へ給ひしと同じ憐を彼の「シベリヤ」に流刑に處せられ居る二人の紳士にも與へ玉はらんとこそ妾が望なれ」と答ければ皇帝も彼女が如何にも自己のためにする事のなきに感じ、直ちに彼の二紳士が重き罪を許されぬ。此後「プラスコビア」は大能の惠みに報ずるには尼となるに如かずと思ひ、其旅中一方ならず心切に與りし「ノブゴセット」の尼寺に思ひを走せけり、されど彼女は先づ信仰厚き女帝聖「デルガ」及び偶像撲滅を以て有名なりし「ブラヂミール」の墓に順禮せんとて「キーフ」に至り、尼となるべき誓をなせり、彼女の如き有望なる小女が父母の許をも得ずしてなすべからざるのヿたりと雖ども彼女の心は此誓をなすにあらざれば一日も安きを得ざりしにて、實に彼女は此事を以て大能天神の大恩に報ゆる唯一の方法なりと思ひしか故なり、彼女は「キーフ」より「ノブコーロッド」に歸りぬ、豫め日程を算しありければ、彼女は父母は多分最早此處まで來り玉ひしならんと思ひつゝ、彼の寺院に至りて尼に樣子を問ひぬ、尼は微笑を漏しつゝ「實にこそ善き都合なり、委しくは妾が室に

て御話し申さん、いざ早く來給へ」と答へぬ、彼女は尼に從ひて室に入るに豈圖らんや、實に父と母とは其室にありき、此時の親子の情の表はれし樣は到底紙筆の力にて示し得べきものにあらざりしならん、此後一週日間は親子共に居りて最も愉快なる日をのみ送りけるが、やがて大尉「ロボーロッソ」及び其妻は其旅路を進むこととなりぬ、「プラスコビア」が餘生は病氣勝なりしが此後も度々父母と出遇ひて互ひに欣ばしき顔を見ることありき、再び「ピートルスボルグ」に上りける時彼女を見しもの〻一人記して曰く、「彼女は俗語の所謂瓜實顔を有し、其眼は深黒に、其額は廣く、風采何んとなく温柔にして、多少悽氣を含めり」。

彼の有名なるスコット氏が其 Jeanie Deans の特質を書くに當りて此廣き額の靜嚴なる風采を用ひしは亦奇なりと云ふべし。

嗚呼此可憐の少女、天の最愛の子、世界最大の孝子、雪ならぬ「シベリヤ」の花、一千八百〇九年十二月九日忽然として此世を去れり。

本年の八百屋物

本年は大外れ神田多町の市場相場は左の如し

○白瓜　は最も大外れにして千住在谷中等の本場は皆無の作にて種さへ收穫する事能はず昨今の價は一本に付上等四錢より中三錢の高價にて昨年三四本にて一錢位なりしに比較せば實の十倍の高價なり併し來る十日頃よりは餘藤き白瓜、砂村葛西等より產出す

○胡瓜　も氣候の爲め本年は五割高にして僅かの殘り物も中々賣行宜し

○茄子　も矢張大外れなるも白瓜、胡瓜程には甚しからず昨年は一錢に付十五六個の品本年は七八個位にて色は燒けて味好からず

○藤豆　は即今出初めにして葛西在より產出す價一升三四錢此れは並作なり

○枝豆　は昨年より以來非常に宜しく恰度生育の際氣候の適せし

故本年は實入充分にして虫喰更になし一把五六錢より上等十錢位

夏漬菜　は平年作一把一錢五厘位

里芋　は先づ中出來にして一升十二三錢

茗荷、生姜　も中出來にして生姜は大束一把谷中本場もの十二三錢にして即今出盛りとなる

夏大根　は外れ方にて先づ一倍の高騰十本束一把十錢より十五錢迄

夏葱　は千住在の產出を以て本場とせるが相應の出來なり

長芋　は近年になき高直にして一本三四十錢

薩摩芋　は目下下總のもの出廻りとなる是も本年は三割高にて一貫目十二三錢

以上の如く本年野菜類は何品に限らず大外れにて高價なれば下等社會には大影響を蒙り澤庵の如きは隨て非常に引上げ昨年一梱一圓五十錢のものは二圓以上二圓四五十錢となりしと云ふ果物も亦た氣候の爲め何れも外れの方にて其景況は

甜瓜　は大外れにして下總物の如きは盆後に一番の收穫丈にて二番は皆無なり成子瓜も同樣にて價は一個一錢より一錢五厘

西瓜　も外れの方にて和洋種共一個二十錢前後より上等三十錢迄あり昨年より三割高

桃、林檎　は中出來

梨　は大外れにて即今赤龍眞鍮等出廻りたり上等一個一錢五厘より下等一錢に付二個位

葡萄　は過般より地廻り出でたるが甲州本場、西洋葡萄は已に市場に出たるが中出來

文藝

六代君（四）

其村子

八方の警固如何にと、まだきより、露に伏す草押別けて重忠こそ、從者も具せず唯一人、彼處此處と馬の歩を運ばせしに、さる些かなる物かげにて、其數凡そ六七人、せこの者共相集り、聲あげて笑どよめく有樣はいとも〳〵興に入りて見えければ、何事を語ふやといぶかしく、轡を控へて此方にかくれ、逐一に聞終りた

る一條のあらまし、昨日も、我こそ人にぬけがけ、功名帳によき名を留めくれんずものと、磨きすましたる鏃を揃へ、こゝよかしこと、求食しに、一むら薄の茂れるあたり、まだいと小さき鹿の子の餘念なく、眠れるをこれぞよき獲物ござんなれ、同じくは生捕にして君の御覽に入れしなば恩賞の程も深かるべしと、息を殺して忍びより、いよ〳〵まぢかくなりしかば、矢聲をかけて押えしに、小鹿はいとゞ驚きあわて、逃げんとさへもせざりけり、思ひの外に安かりけりと、やがて腰なる捕繩にて、そをからめんとせし折しも此小鹿の由緣の者共なるべし、大小其數凡そ二三十八方より集まり來り、助けんものと角をならし聲をあげ、勢揃へて我にむかふ、されども何條事のあるべきと片手にて小鹿を押へ、片手にて群れ來るを防ぎつゝ僅かに二三歩七八歩と、行くに從ひいよ〳〵彼等の追ひ來り今は早如何ともするに由なく、殘念ながら獲物を打捨て歸

りたり、誠に大勢の身を一つにして來らんばかり、世にも強きものあらず、弱き鹿も勢込んで來りなばそれこそは中々強し、石橋山以來諸所の戰場に於てはかつて一度も、敵に後を見せざりし某、女々敷も鹿に後を見せたる一條かくの如くに候と、年がさと見へて髯多き上座のものゝ語らひ居りて候が、如何に江間殿近頃珍しくも面白き話にては候はずや、さるにても其小鹿を助けたりける鹿どもこそ、適はれ忠義のものなりけり、誠に々々命にかけて大切と守り育てたる幼きものゝ身にかゝる今はといへば、實にこそかくはありつらめ、さればせこの獲物を放したりけるこそ誠によきと得たりといふべし、彼志うねくもそを放たず、如何にしてもひきつれ行かんとなしければ、まさ〳〵多くの鹿どもの爲に困しめられ、却つて己が身を危ふせしやも知るべからず、はからずもかゝる敎訓を目の前にだて得たる重忠、早速君の御きゝに達せんと今しも參上

致せし折柄、はからずも何れも方の命請、文覺御坊の御有様誠にさこそと思ひやり候、されども初にも申し



つるごとくとは一條の物語、ゆめ〳〵諫言諷刺などいふものにて候はねば、我君にも志かく聞取玉ふべしと始終を聞終りて源二位は、重忠何と申す、スリヤ其方は其小鹿を放ちやりしせこのものこそよき計らひとしたといふのか、さん候小鹿を放ちやりしこそ幾重にも〳〵よき仕方とこそ存候、もし其小鹿をはなちやらずば多くの鹿はいかでさるべき、飽くまでも〳〵、力盡きて倒る〻までも、ひと〳〵に此小鹿を助くるか、もしくは此小鹿と共に倒れ候か、いつれにも各力を併せ後を追ふて追ひ來り、或は角にかけ、或は蹄にかけ、樣々と彼を困めなば、何條以てたまるべき、よし又幸ひにして己が假屋に馳せつくともこれがために多くの朋輩をさわがせ、なんと致しなば、それこそは固より策の得たるものにあらず、もし誤つて鹿の爲一命をうしなふの事もあれば、大切なる君への奉公、何の身を以てなすべきや、さればこそ此重忠、かくは申上しなり、偏に君の御賢慮こそ、仰きあけ奉る、江間殿にも亦如何に思ぼしたまふぞと、問ふ聲の下より義時は、さん候重忠殿、われも亦御身の如く、一々感じ入りて候なり

此義時も此後もし、かゝる事に出合なば又其せこに見習ふて、然かなすべし、やぶにも功のものありとは誠によくもいひしものかな、と兩人のとも語ろふ中を遮り、汝等兩人がいふところ、其理なきにはあらざれども、一朝其小鹿野にかへりて成長なせば、中々に今せこの者が致せしごとく、手捕なんどにすべき由なし、然る時には如何になすや、さればにて候たとひ成長致し候ともたかゞかよはき鹿の事、何程の事か候べき、それに又此鹿の一家一門は殘らず此度の狩倉にて、倒れはてゝ候へば、こを守りたてゝ後に害をなす等いふ恐れもゆめ〳〵あるべからず、されば君の宣ふごとく來りて放てし人をかむなんど是一片の杞憂にすぎず、傳へ聞く古の明君は降參の士を其まゝ用ひて疑はず、或は敵の間者を放し還して其言を信ならしめしなど、所謂赤心を人の腹中に置てふの所行、誠に〳〵天下後世の手本なり、我君の此度全國に莊園の守護地頭を置きたまひし御事も、伊豫殿初め備前の守が殘黨、又は平家の餘類などたとひ處々にありて亂をなすとも一々に兵を動かして是をせめず、其處々に志たがひて是を治めしめんとの御意なるべし、これ決して〳〵敵を恐るゝが故にはあらで、再々天下の人心を動かし世を亂さんことを恐るゝ故なり、何よりも志かく度々兵を動かしなば都への聞へ誠に鎌倉の威光にもかゝはる事と存ずるなり、故にこも亦其備前守伊豫殿の餘類を治めたまふが如く、成べくゆるやかなる手だてを以てのぞみたまひなば、或はよろしかるべしと存ずるなり、此小鹿を助けたることを笑ひたまふ御身にて何とて門脇殿をいとも手厚く御もてなしはたまふぞや、小鹿の成長するまでには日も近きにはあらざるべし、されどもこれはすでにたけき大鹿の角も蹄もそろひしもの何とて御助けありしぞや、唯々御助けありしのみには候はず、度々御身近く召したまふ御事など重忠誠にいぶか

し丶、殊に又先の程池の禪尼が云々となき人の名まで罵りたまひたるにひきかへて其禪尼がゆかりなる門脇殿とは何故むつみたまふにや、誠にいよいぶかし丶、門脇殿を助け置きたまふとも君の枕高しといへばあながちに此せこを笑ひたまふ故あらざるべし、承はりたきは我君の御心なり、時に苦言をまいらすは臣たるもの丶勤とぞんじ無禮の過言此の如し、前後を顧みざるの段偏に御免下さるべしと、たとへば水の流る丶如く滔々として演べ來る始終に源二位はハッタと御膝うちたまひ、重忠々々、何等の御意に候ぞ、イヤ何でもない、今汝が言ふてきかせし謎の一々、賴朝殘らず聞きわけたぞ、然らば此重忠の雜言何の御咎もこれなく御き丶流したまふとや、何き丶ながすどころではない、六代の命如何にも助けてつかはさう、余も其せこの眞似するのじや、文覺上人は忿怒の相を柔らげて、何ァノ六代君を御助け下さる丶とや、如何にも〱重忠の諷刺によりて全く余が心は解けたり、六代君こそ今日唯今命助けて御坊が弟子にまいらせん、不肖重忠が言葉御用ひあつて六つヶ敷命請の願御聞届け下さるとは誠に以て面を興すと申すもの宜しく御禮申上げ奉る、此上はチットも早く文覺御坊、サなり〱思はずも茲に多くの日を盡くし、日限も今や殘り少なくさしせまれり、コレよりは御宥免の御狀を頂き急ぎ罷り下るべしと、義時これを承はり六代君御免の狀を頂き〱文覺御坊、百萬の堂塔建立まし〱たまはんより是に上こす、善根功德とては候はず、日夜高雄にありて彼れと諸共、君が萬歳を祈りまつらん、さるにても茲に一つの難義といふは、山川幾十の驛を隔てし都路へひた急ぎに急ぐとも徒歩にては日限の間に合ひがたし、願くは君が御料の其内にて何れなりとも一頭の駿足、何卒々々拜領致度こそ候へ、そはいと安き事どもなりと源二位の言葉によりてやがて引き出したるは星影とて

先きつ頃佐々木四郎高綱がさしもに早き宇治川を先登なせし池月につゞいての御秘藏なり、黑漆の立髮、鐵の蹄、全躰一々具足して見ぬ古しの驢といふとも、又は赤兎馬なりとも、如何でかこれにまさるべき、然らば是より御免あれと一同に禮を述べて文覺上人、ひらり鞍上に打またがり、一鞭發に動くと見えしが、高嘶きを風に殘し、登天入海の勢するごとく、やがてぞ見えずなつたりけり。

下女の居眠

一葉庵主人

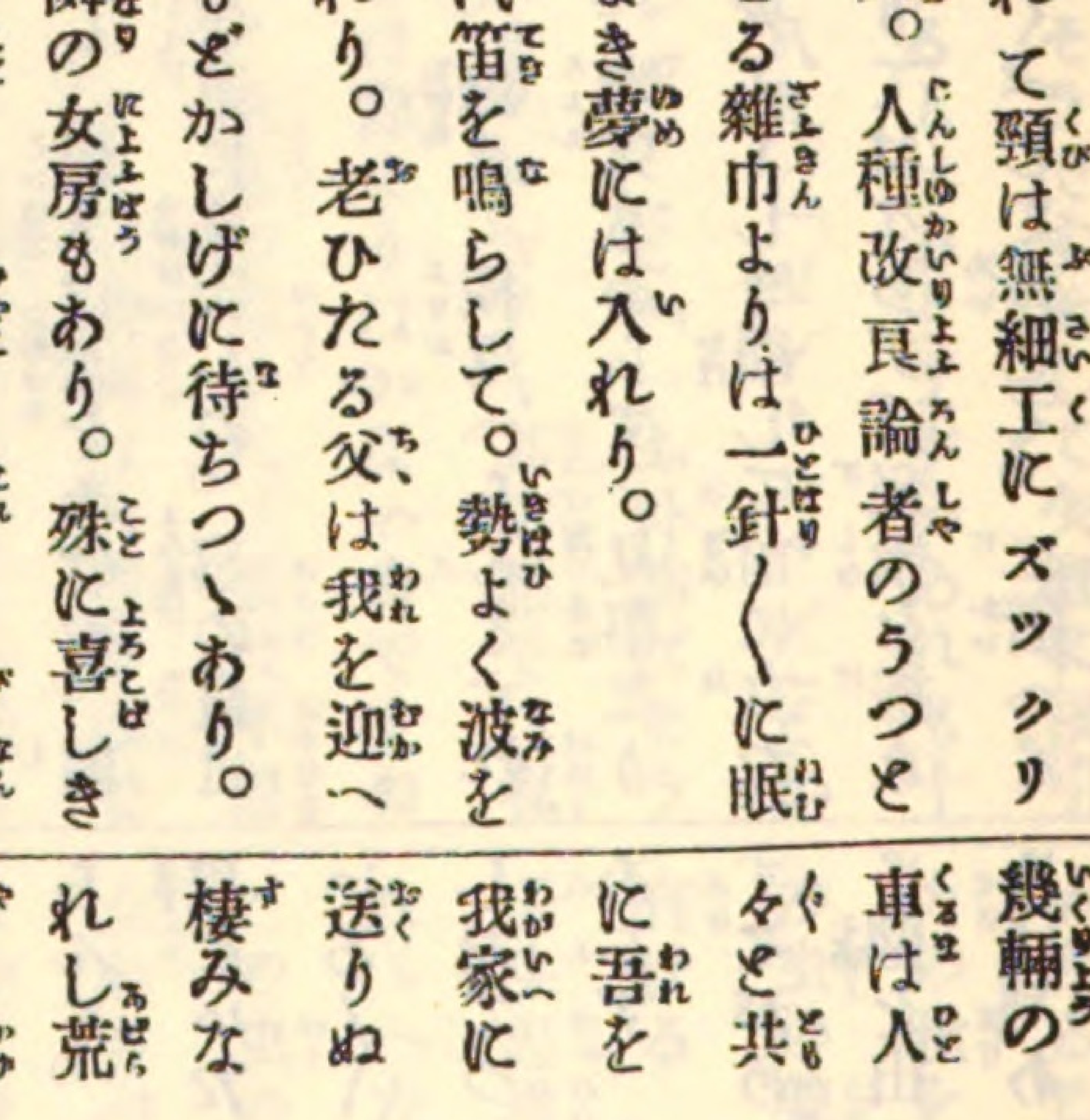
時計の針も午後二時をさす雜巾の。あつきは持前なる土用の半。輕羅きて風通しよき二階に花莚しかせ。氷のラムネのと仰せらるゝ奥様の。御身とて我身とて皮に薄い厚いはなかるべし。それを下女と名のつくばかりに。朝は小暗き内に起され。夜は眠い目をこすりながら。面白くもなき御夫婦の痴話苦說聞せられ。揚句には吾を捕ひて旦那殿の惡口。ムツとする事はありても笑つて居るつらさ。御酒がすめば大抵十二時を聞かぬ事なし。

飯を焚く。味噌をする。魚屋へかけつける。酒屋へ飛んでゆく。坐敷の拭掃除。庭の打水。水も汲め洗濯もしろ。坊ちやんが學校への御伴。手紙の御使。歸に髮結の所へよつて來よ。序に八百屋も忘れまいぞ。洋燈の掃除をして置きやよ。行水の湯が沸たかへ。やれ給仕せよ。床のべよ。ア、なんと我身なればこそ心棒もなる。產湯に水道の水あびた女の一日もつとまる奉公かや。給金とてはタツタ一兩一分。髮錢と湯錢自腹を切らぬ丈けが目付者なり。每日の事には誰にさせても。あるべき筈の粗忽。夫れを口汚く朝の事は寢る時迄。今日の事は明日。今月のは來月迄も。繰返へして小言いはるゝ奥様には。勿躰ないがウンザリする。旦那樣

は奥様次第。近所で鼻毛とやらいふて笑ふも道理なり。肥肉にして色は白けれども。髪薄くチリ〳〵とちゞれ。目は顔の造作に合せて非常に小さく。團子鼻ひく〳〵アグラをかき。頬は赤くたれて頸は無細工にズックリと太く背巾と尻とは大丈夫。人種改良論者のうつとりさるゝ價値あり。手にせる雜巾よりは一針〳〵に眠氣まずさして。遂に心地よき夢には入れり。

東京灣汽船會社の汽船は汽笛を鳴らして。勢よく波を蹴りつゝ加知山の港に入れり。老ひたる父は我を迎へんが爲めに。艀のつくをもどかしげに待ちつゝあり。親戚の娘も來りてあり。隣の女房もあり。殊に喜しきは其内に我戀人を見たりし事なり。都にも稀なる美男。盆踊の手振。さては唄のすぐれたる。何をさせてもソツの無きは我戀人なり。

老ひたる父は手をとり涙を流して。無事にかへり來れるを喜べり。我仕度の立派なると。東京土産の贅澤なるとを驚きぬ。戀人は目元に無上の情をこめて。待てりと言はず待てりと笑めり。吾は早や老父の涙をとふの心うせぬ。



幾輛の車は人々と共に吾を我家に送りぬ棲みなれし荒屋の影はうせて。立派なる座敷。結構なる二階家となれり。老父は大漁の利によりて多くの金を得たり。我が結婚の家として斯く新なる家を造りと説きぬ。吾は此時戀人の紋付の羽織仙臺平の袴に威儀を正して繪に見たり

し如き美しき島臺を。前に控へて坐せるを見たり。組盃と雌蝶雄蝶の銚子も備へられぬ。吾も何時しか綺羅を飾りて其傍に坐せり。仲人として漁場の四郎藏夫婦も來れり。去れど夫婦はかゝる晴の席に。垢つき破れたる仕事着をきて。繩帶しめて彼方此方周旋せり。これとて咎むべきやうはなし。戀人は盃をあげぬ。四郎藏は濁聲あげて。高砂可笑氣に謠出しぬ。喜の血は胸をつき。頭に充ちぬ。

背をハタ〳〵とうつ人あり。驚きて振返へらんとすれば夢さめたり。戀人あらず。老父もあらず。見事なりし島臺も消へぬ。奥様はニが〳〵しき顔して前に立たれたり。夕飯の仕度遲くなりてはならず。坐敷を掃き椽をふき。庭に水うつて置くべしと命じて。二階へとのぼられぬ。

豆腐屋の聲聞へぬ。煮豆賣の振鈴もひびきぬ。去れど四郎藏の高砂謠ふ聲はあらざりき。

入谷の牽牛花

桐廼舍女史

朝貌の花のゑまひに誰れも皆。思ひいりやの里や訪ふらんと。思ひ立ぬる朝不風流にも。小車をはしらせ彼里にいたり。園とも見ありくに實に聞しにまさる花のいろ〳〵に置きそふ露も色あるかと。あやしまれおほしたてつる人の。心盡しも思ひやられて歸るべき心もあらず。きぬ〳〵の別れも斯はをしまれじをと。あかすながめッゝ、瑠璃と赤との二もとをあがなひて。今はと園を出んとせしに不斗耳にいる話聲聞ともなしに佇めば瑠「あか子さん一寸御覽なさい今朝も大層人が出るではありませんか赤「眞にるり子さん彼樣に人は出ますが彼人等は平日でも薄暗内から起て働くのでせうかろ「イヱ彼人等は平日は却て朝寢の人が多いかと思はれ

ますわ、そんなら我等を眞に愛して此樣に早起をして見に來るのでせうか、イヱそれも愛する人は稀で只閑人か運動の目的とするばかりそれですから露の消ぬ間とか暑く成らぬ内とか誘引合そうですそして矢鱈に根引



する人はありますかあれも十に八九は「ゼントルマン」とか「レヂー」とかいふ外飾だそうですわ、ヲヤ／＼其御話では私等は露よりはかない身ですねへと歎息の樣子に。妾は不思イヱ／＼其御說は大違ひ誰でも全く親愛しますといはんとする時車ががたり車夫「モウ御宅ですと呼覺されヲヤと驚かたへに合乘の朝貌の露冷かにこぼれぬ嗚呼たま／＼朝起をしたので晝寐の邪魔を志たのかしらむ

鈴虫

石井をみ子

ふり出でたるほど花やかにをかしう心やすく、いまめいたることそらうたけれど物語に見えたるがごとも、大方の秋をはうしと志りにしを、げにふりすてがたきこの虫の聲かなと女の身にはまづ志たはるゝものになん有ける

壬生忠岑が野邊のを聞きて、谷の水音にあらがはれとた、へたりしもうへにこそありけれ

この虫のねのことは北邊成章ぬしの松虫をこれなりと女わらべなどのたがへたるもふるくよりのことゝいはれたりける又齋藤彦麻呂翁がものせるかたひさしに、形をあらはしてわきまへられたるにていとあきらけし

なにがし寺の七種の寶物の時なる金鈴ゝくれがしのやしろにかゝげられたる物の音ものならずかし

本居の翁が學のあとをたのむ童にはこのねをだにつくゑのわきらにとゞめてましとなんおもはれにけるはかなうもみゝとゞめたる人の心にけしうもかうやうのことを種のをかしさをさへとめさせぬるぞいみしきいかでたゞにめでゝこの秋をすごさんや、うつそみの



人にしてと口のなからにはいふものから外にはふりいたさずてなんなほきゝゐたるにひとりのみきゝをらんもほひなのわざやおなじ心の友とともにめでぬかさんにはいかばかりからしからましとまたおもはせぬきけど〳〵あかぬねにひたをしみにをしむひまをさへわすれはてしよいざとてまがきのもとよりやをらあゆみいでつるにあはれ〳〵たゝずみがちなり。いまはとてあしをそらにはしらむとおもふにもえなしがたし」げに〳〵ふりすてがたきねのめづらしさよ、さてとてうたひいでらるゝものはれいのふるごとうたなりけり

あさぢはら　をだにをすぎて　もゝつたふ
ぬてゆら〳〵も　おきめぐらしも

かくちならしいでつるこゑのみぞこの虫のねにはまされるなるべし、かくうたひいでゝなほふりすてずなんありける

あな、めでたう、らうたう、をかしう、ものらおもはする鈴虫のねや

魚類の直段

房州三崎近海より深川濱魚がし等へ入船する小魚類は昨今風向き惡しき爲め非常の不漁にて相場も隨つて高直なるが河岸相場は料理屋向黑鯛尺もの一尾二十五錢位コチ洗ひ物同十五六錢

二三銭車海老四五銭位にして其他海老セイマキ海老等の如きも甚だ少なきを以て大抵の天ぷら屋小料理屋は休業の有様

談叢

松田の緑

中島筑山

小引

おのれこゝに物せむとするは、淨瑠璃院本の所謂、鏡山の實錄なり。鏡山としいへば、兒童走卒も、その筋合を知らざるなく、婦人女子も、その成りゆきを識らざるなし。去かるに之れが實錄に至つては、人之れを知るものまれなり。何を以てか然る。

夫れ淨瑠璃院本の文は、最も普通にして、最も妙味を含み、最も人口に膾炙したれば、人の耳目に懸りて、赫々たること、前日の事の如し。實錄は之れに厭して、その如いと、生硬難澁なるが多くて、人の口に上り難ればなり。

おのれがこの文、固より以て淨瑠璃院本の文とその衡を爭はむとにもあらず。人口に膾炙せんことを、求めむとにもあらず。たゞその筋合だけを世に知らしめて後の文學者その人を待つになむ。

第一回

石見の國、濱田の城主、初め松井とよび、六條判官爲義の後胤にて、高五萬四百石を領せしが、後ち松平の氏を賜はり、世々松平周防守と稱し、又た御名前の一字をも拜領しける。時の城主を松平周防守康豐となむいひて、ざえ才學、人にすぐれ、國家の政事滯りなく、殊に百姓の農業に思ひをかけて、いと賢明に渡らせ給ひけり。御奥方は、同國津和の城主、宇多源氏の後胤高四萬三千石を領する、龜井隱岐守重親の妹、龜井豐前守慈政の息女なり。隱岐守家督をつげる後、周防守

と婚姻せらる。奥方、容顔いと麗はしく、常に五常の道を守り、深く下をあはれみ給ひ、春の花の朝には、和歌をよみ、秋の月の夕には、琴をしらべさせ給ひ、御夫婦のかたらひ、比翼連理、よその見る目も羨ましきほどなりけり。

龜井家より奥方にかしづき來りし女中多きが中に河合某といへる、筋目正しき士の娘あり。奥方の未だ生れ給はぬ前より龜井家に宮つかへして、澤野とよべり。周防守にとつぎ給ふに及びて、御里付となりて、その家に來り、年寄役に選まれて、奥向の事、大小となく、これに決せずといふことなし。奥方はいふに及ばず、周防守といへども、聊かその心に適せざるときは、之用ゐず、周防守も澤野にうちまかせ、そが計ふまゝにし給へることいと多し。さなきだに、女はいとゞ養ひがたしといふなるを、況して短氣にして、我儘なるものなれば、我覺え君に目出度を鼻にかけて、無理をいひかけ、人を苦しめ、人を辱しむることいと多きをやかゝりければ、人々蛇蝎の如く、おぢ恐れけれども、さすがは、大老の事なれば、うはべでかしこみ、敬ひて、一言のことばさへ、かへすものなかりけり。

こゝに又た奥方に召しつかはるゝ女にて、おみちといへるがあり。顔容人にすぐれ、心ばへやさしく、源氏伊勢物語に心をよせて、歌の道にも暗からず、琴さへいとよくかなでければ、奥方も、二なきものぞと思ひ給ひ、朋輩の女中にも、やさしく、あはれみ深ければ、奥中第一の女とは、家中とりどりの評判なりける。父は大和の國、郡山の城主、本多幸之助の家臣にて正木某といひ、祿千石を領せしものなるが、幸之助、幼少にて失せにければ、家督相續の事にて、家斷絶に及べり。正木も浪人の身となりて、母方の苗字に改め、岡本佐五右衛門と稱し、矢の倉邊の旗本につかへて、家老職をつとめけり、三人の小供あり、長をおみちとい

ひ、次をおみやといひ、その弟を三五郎といふ。三四年以前よりおみち周防守の奥方に奉公して、忠勤更らに怠りなし。

頃しも享保九年、甲辰やよひ卯月の初めつかた、空にしられぬ雪ならなくに、垣根にしろき卯の花咲き出でつ、奥方様がは近う出で給へば、ほとゝぎす鳴にけり。あだに聞かむも、心もとなければ、おみちを召し、初郭公を題として、歌よまむとの給ひける。お道は部屋にて湯などつかひて、下女のさつに、髮などとかせて居たりしが、奥方のお召しと聞き、手早く衣服をあらためて、志づ／＼と、長つぼねに立ち出で、上草履をたづねけるに、見えざれば、下女のさつともに、こゝかしこかと、あまねくさがし求むれど、影だになし、女中又たもやあわたゞしく、奥方の御待ちかね、早く御上りあれと、せき立つれば、さなきだにお道はいとゞ内氣にて、上を重んずる性なれば驚きあわてゝ、草履をたづぬるひまもなく、そこにはき捨てたりしものをはきて、急ぎ御前へ出づ。奥方御機嫌うるはしく、歌の會を催させられ、夕暮より琴など引きて、御聞きに達しければ、ひたすら興に入らせられたり。

局澤野、御前へ出でむとて、部屋を立ち出づれば、端きにぬぎたりし草履の見えざるに、何にも知らぬ下女どもをしかり小言うちいひて、奥廊下座舖の口に來れば、こはいかに、はきしは誰とも知らねども、まがふ方なきわが草履、澤野急にせき立ち聲あらゝげ、誰がこの草履をはきたる、足なくてよも獨りで來るまじ、常におのれのはなうて、たゞ人のをあてにする志れものあり、かゝれば油斷のならぬ世の中やと、口に毒氣のかぎりをはきて、廊下をなりわたりてのゝしりける。折りしもお道は御前のお暇給はりて、部屋へ下らむとて、こゝへ來かゝりたるが、この聲を聞き、顏を和げ、局の前に手をつかへ、いへるやう、御局樣とも存ぜず、

先程急の御召に草履たづぬるひまもなく、そこにあり合ふものをはきて參り侍る、不調法の段は幾重にもゆるさせ給へとて、自ら草履取りて局の前へ直しける。澤野、怒りの聲あらゝげ、そなたも武士の娘でないか。武士の家に生れなば、禮義も少しは知るべきに、昔よりはきものをはきちがへて、うちはたしぬる例もあり。はきちがへてさへすまぬものを、ましてわざ〳〵人の草履をぬすみたるをや。そなたは、たゞ不調法としいへば、何事もすむと思へるか。但しこのばゞを、ふみつけにしてはきたるか。今は年こそよつたれ、このばゞが、もし男であらば、弓矢八幡ゆるしはせまじ。このやうに辱しめられては、普通の人間ならば、いかばかり、くやしからむ。しかし人の物を取るほどなれば、定めてくやしかるまじ、人の皮きたる人でなしめ。そのうへ、そなたのはいたる、この草履。そのまゝわしにはけといふか。ぬすみする、そなたが、はきちらしたるこの草履、見るもなか〳〵けがらはし、ほしくばやらむと、足にて草履を、お道にけつけながち、惡口雑言いひちらし、御前をさしてゆく。お道は無念やる方なく、涙にむせべど、さすが、女のかなしさは、一言のことばさへかへさず、うしろ姿を見送りて、胸にせきくる、つかへを押へ、しばしたゞずみ居たりしが、やゝありて我にかへり、涙をぬぐひ、しほ〳〵として我部屋に入れり。

富士山から飛び下る

山水生



同行七八人ばかり、二人の強力がついて、須山口の六合目を一列になつて降りつゝある、中に一人は洋服扮装にて其内の主人らしく、外のものは法被股引、これは從者

らしい、孰れも身軽の扮裝にて、金剛杖に草鞋をくゝりつけ、燒石の上をつたひて次第に下へ下へと蛇の這ふやうに曲線にうねりうねりて足を運んでをる。

セル地背廣の洋服を着た男は年齡廿四五、慓輕で活潑で面白い人物なり、濱口某と呼びて、東京に近き田舍の豪家の若旦那、平生山などへ登りて危險な事を試むることが大好で、本年は自家の雇人や作男を連れて富士登山を企てた。

絶頂に登り詰めてこれまで降りしまでいろ〳〵面白い譚もあれど、それは略して六合目から降りかゝつた譚をいたさう。

此一行はこゝまで下つたが、別にこれぞといふ事もなく、珍らしいといふは、たゞさへざら〳〵として居る燒砂が人の歩するに從ひて下へずつて行く、ずる〳〵と足が自から運んで行くは、富士登山者は誰でも實驗すること。



先に立つて居る濱口某は一同を顧み、オイ駒も八太も見て居や、おれがこれから面白い事をして見せる、オイ強力もまつかり見物したが好いと、草鞋をつけたる金剛杖を肩に引かつぎ、鈴ケ森の飛脚の躰でござい、エッサッサ、エッサッサと、飛び出さんとすれば、一同は口を揃へ、旦那危ぶでせへす、ひよつと足を蹈みすべらしたらそれこそ大變です、お止なさいと止むるも聞かず、ナーニ大丈夫、構ふことはない、ナア強力、おれの手

際を見て居玉へ、皆の衆、エッサッサ、エッサッサと濱口の旦那は、芝居で演る通りに手態足振可笑しく飛び出せば、彈の如くハッと言ふ間に脚を蹈みすべらし、ずる〳〵〳〵〳〵〳〵と千丈の下へと轉がり落ちた。

濱口は脚を蹈みすべらし、ハッと魂を驚かす間もなく瞬をする間に、身は五合目邊にあッた、アーと吐息をつきて山上を見あぐれば、今轉がり落ちた勢で砂煙が渦を捲いて何にも見えない。濱口は一時茫然として居たが、フト自分の躰を見ると、洋服のズボンの二三個所はこすれ破れ、上衣さへ右の臂の部は、恐ろしく破れて居れど、金剛杖は手より放さなかッたものか、杖は自身の傍に横たわッて居た。

濱口は實にあぶない所で足をくひ止めた、躰が止まッた所は岩石が多く横だわッて、これに一つ頭をぶッつけやうものならそれこそ粉微塵であッたが、濱口は幸ひに、しかも其岩石で足を蹈み止めたと見えて、しやんと腰を岩の上に落ちつけて居た。

漸く砂煙は收ったから、山上を見上ぐるに、同行はどこへ行ッたか影もなし、これは餘程轉がり落ちたに相違ないと瞬もせず山上を見つめて居ると、七八人の姿が見えて來た、其七八人の姿は草鞋ほどの大で、こゝへ濱口が落ちて居るのを知らぬ顔で下りて行くやうだ。

濱口は其岩の上に衝立ち、オーイ〳〵と幾度か聲を懸くれど、同行の耳へは入らぬかして、七八人は足も止めず、トッ〳〵と下へ降りて行く樣子。

もう氣が焦立ちて同行の行く處へ往かんと、足を蹈み出したが、ずる〳〵と砂が滑りて上ることが出來ない、どう氣を揉んでも藻搔ても思ふやうに行かぬゆゑ、流石の濱口も根氣をつからし、元の岩へと立ち戻り、山上を見ると同行は次第に下へ降り行きて、はや草鞋ほどの影も見えなくなッた。

濱口は懷中時計を探り見るに午後七時に近く、四邊を回顧せば暮色蒼然として山下に滿つ、上を見れば最早人影なく、下を見れば四合目の小屋の旗が夕風に吹かれて遙に見えて居る、もう猶豫ならず、若し夜に入らば如何なる危難に遇ふやも知れず、よしさなくとも食物の持參もなければ餓死せんも計られず、それよりも斷然たる處置を爲さんと、濱口は大いに決心したる如く急に岩の上へ立ち上つた。



岩の上に立ち上ッて四足の草鞋を金剛杖より解いて、一二足を足にくゝりつけ、一足とこれまで穿きし古びし草鞋は破れし「ヅボン」の部へ結びつけ、兩手にも殘の草鞋をいはひつけ、さて愈々決心を實行せんと立ちて岩より下を覗けば四合目は遙の下邊にあり、斷岸絶壁にはあらねど、これからそこまで飛び下らんと思へばよき心地はせず足裏むづ掻きと同時に身體ビリ〳〵と電氣のかゝりしやうに感じ濱口は岩の上に躊躇みたるが、やがて兩足を岩の外に延ばし、兩手を岩の上について居たか、思ひ切つて目をつぶり一二三の懸聲と共に飛び下ッた。

濱口の身體は坂上より俵をころがす如く、ころ〳〵〳〵と砂煙の裡に埋まり、瞬間にして、恰も四合目の小屋の所へころがり落ちた、丁度其時山上よりは燒石をつたひて同行が來かゝッた、今少しの違にて濱口は同行の頭の上へ落ちかゝりさうであつた、併し濱口は草鞋と洋服を散々すり破つたばかり、いづれ四合

目に着いたら手を分けて探さうと企てた同行の喜は一方ならず、これは今より四五年前に予が知れる人が富士登山中で起つた眞實の譚

一種の洋服

大阪にては昨今絽の洋服切りに紳士間に流行す其仕立は多くモーニングコート若くば角前仕立の背廣にて上衣に黒絽を用ゐ胴衣には紅色の絽又は同色の他の切れ地を選ぶ一見中々に鮮麗なれどもちと茶番らしき所あるべし

家政

小兒敎育に就て

家庭にて兒童を敎育せんには先づ一家相謀りて其方針を一定し敎訓及び命令の出るところを一つならしめ其方向に進ましむべきなり若し然らずして父は斯くせよ母はかくするなかれと敎へ或は一度は善しと賞したるものを時には惡しと戒むるときは無分別なる兒童は從ふべき所を知らず終には大切なる兒童をして善惡を差別する心を失はしむるのみならず決斷力を鈍ぶくせしむるものなれば其害尤も恐るべきなり又家庭敎育の方針一定せざる家にして母の惡しゝと兒童を戒むる時に父は又母を制するが如き事ある時は兒童は遂に母を敬はざるに至るべし故に家庭敎育の任にある者は能くよく心せざるべからず

又兒童の接する人々は成るべく之を擇ざるべからざるが中にも朋友は殊に然かなり大抵世の少年が惡習に染み墮落するは多く不良の友と交はるより起るものなるとは人の熟知する所なれども實際に當りては其注意を怠ると世の常なり然して人は己の心をよく迎ふる友に隨ふものにして殊に未だ理非を辨へざる者は益友より寧ろ惡しき友を歡ぶものなるとを思はざるべからず

小兒に食事せしむる心得

食事は一家の會する時にして和樂の在る所家庭風儀の現はるゝ所なれば小兒には此の心得を敎へおくべし何事にても行儀の正しからざるは見苦るしきものなれども食時に於て行儀正しからざる程見苦しきはなし今食時の心得ともなるべきもの數件を記さば

一、食時の際立ちながら或は歩きながらなど食せしむべからず日本風の座敷ならば兩膝を整ひて坐せしむるが如し

一、人の食し居る前に手を差しいだすなど見苦し離れ居る食物を取らんとて他人の前に手をさし延ばす事は小兒の往々なす所なり

一、食時に箸碗など凡て器物にて戯れをなさしむるなど宜しからず

一、物を食するに手など汚れたるとき衣服にて拭ふも善き事にあらず

一、遽たゞしく食し又騒がしき音さすることあらしむべからず

一、口音させ又口に物を入れながらものを言ふも悪ろし

一、食物をこぼさせぬ樣注意すべし大なる食物のかたまりを口に含ましむべからず

一、食事の時は髮、顔、手などを奇麗になし居らしむべし不潔なる樣子は見る人の心地を悪くし味よき食物も之れがために其味を失ふにいたる

野　菜

夏日には野菜など最も速かに枯凋するものなれば是を防がんに先づ桶又は鉢に水を盛り其中に野菜の根部を一寸或は二寸程浸し置く時は數日は枯凋するの憂なし又野菜には時々小虫の附着することあり若し知らずして之を食する時は大に身躰を害せらるゝことあり此等の小虫は常に葉の裏に附き居りて容易く發見し能はざ

れば何れの野菜にても之を料理する前に小虫を除くべし之を除かんには鹽水の中に其野菜を倒さまに浸しおくべし然すれば小虫は死して桶の中に殘るなり

醬油のかびを防ぐ法

醬油のかびを防かんには芥子を麻布に包みて醬油の中へ入れ置くべし又醬油の味或は色の變りたる時には其醬油を鍋に入れ最初に強き火にて煮立て徐々に火を弱くする時は泡と汚物は浮き出づるなり之を掬ひとり冷し置けば能き醬油となるなり

九月中の盆栽

◎松、此月上旬より古葉を取るべし、又父人松と稱するは枯葉のみ取去りて可なり
◎檜葉と竹、枯葉を去るべし、何れも清觀あり、
◎南天燭、此月中旬より次第に愛觀を増す、
◎薔薇、中旬より開花す、
◎百日紅、中旬頃まで愛觀するに宜し、
◎柘榴、結實の美なる賞觀最も可なり、
◎柹、此月下旬より實熟す、頗る雅賞によし、
◎胡枝木、此月下旬より開花す、賞觀佳なり、
◎秋海棠、蝦夷菊、雁來紅中旬まで愛觀すべし、
◎萬年青、賞觀最佳

雜録

支那の婦人

快哉生

私は世の所謂支那通ではありません、假髮の辮髮を付け、蒜臭き御馳走を頂き、賣丹賣や、讀書人の風を裝ふて、支那の內地を旅行したものでもありません、西瓜の種子をカジリ、老酒を飲み、燕の巣を味ふて、支

那の料理屋に持たものでもありません、況して、丸顔細足の婉麗ぱい蘇州美人の玉顔などを眺めて、水滸傳に所謂風流の遊をしたなどは以ての外の事であります、然りとて、又た近頃世間に數多き從軍歸りの先生の如く、遼東半島や、山東省や、臺灣などの片田舎を素通り一片の御客とは少々異りた處があるのです、實を語れば、營口にも居りました、天津にも參りました、北京にも、芝罘にも、上海にも、蘇州杭州にも參りました、萬里の長城も見ました、楊子江も遡りました、支那の政治も一通りは承知して居ります、中央政府の政治家も重なる人々には面會を致して居ります、支那の人情も風俗も、社會一般の制度も、組織も、宗敎道德の感化力も、商工業の歷史も現狀も、又た將來の希望も、前後壹年壹貳ヶ月の間に、出來る丈けは觀察を致した積りであります、併し支那の政治、宗敎又た商工業の事など、角立ちたるとを記しましても、家庭雜誌の讀者諸君には如何かと存じますから、此處に諸君に直接御關係のある「支那の婦人」なる題目に就て少しく、私の觀察を御話しするとと致しましよう、勿論私の觀察を悉く書き立つれば、兎ても五ペーヂや六ペーヂでは盡きません、此處に其の大體を申上るのみであります、

家庭時代

固より孩兒が、母の躰內より、浮世に生れ出でたる當時は、東洋でも、西洋でも、「白ンボウ」でも、「黒ンボウ」でも、英雄でも、豪傑でも、盜人でも、乞食でも、何の相違の有る可き筈なく、只だオギヤ〳〵と叫ぶのみです、如何に無見識なる、意氣地なき支那婦人でも、生れた其の當時より、彼れ程迄に無見識、無意氣地では無いのです、足も細くはありません、智惠も啓發すれば、發達出來る丈けの智惠は持て生れるのです、其の證據には、家庭及び街道にて、男兒と遊戯する四五

歳乃至六七歳の女兒は慥に男女同權です、完全なる足の發達を爲して居るのです、此の當時の女兒は如何なるものかと申せば、誠に天眞爛熳、頗る愛す可きもので頭には短き髮を三ッ乃至四ッに分けて、宛然ら、蜻蛉の如き辮髮を三四個も結び、近來西洋より輸入し來る色金巾の衣服を纒ひ、嘻々として戯れて居ります、衣服に就きて私の感心致しました事は、支那人凡て例の猿股引樣のものを穿て居りますから、如何なる女兒でも、私部などの見へる恐はありません、冬時は固より如何なる炎天酷暑の候にも、頗る見宜いのです、私は切に日本の母親に御忠告申し上げ度きは、街道にて如何に幼稚なる女兒なりとは云へ、兩足は勿論甚だしきは、不都合の場處迄顯はして遊ぶは、誠に醜躰極まるもの、國の躰裁にも係はりますれば、此處は充分御注意を願ひ度いのです、

扨て如斯にして生長したる七八歳の支那女兒は、之れより、如何なる敎育を施さるゝかと申しまするに、男兒さへ充分敎育するを得ざる、支那人のとなれば、到底女兒の敎育などは、思ひも寄らぬとで、男兒なれば不完全ながらも、我が國昔日の寺子屋の如きものに入門して、日々讀書習字を習ふ便利もあれども、憐む可し女兒は之れより蟄居時代に入るのです、所謂箱入り娘にせらるゝのです、薄黒き、醜き、臭き、蒸し暑き室內に籠ち込められて、母親に就き、針仕事、禮式、家政の稽古をするのです、運動が足りませんから躰は弱る、日光に觸れないから色は蒼青める、肉躰が弱くなるから元氣が無くなる、精神が鈍くなる、學問を爲ないから希望が低くなる、抱負が小になる、果ては男子に、犬猫同樣に使役せられ、虐待せられ、壓制せらるゝも、痛痒を感ぜざるが如く、無見識、無意氣地になり果てゝ、終には精神的に暗殺せらるゝのである、右は中等以下の家庭に於ける娘達の悲境ですか、上等

社界の娘も殆んど大同小異で、勿論傍らに居りて慰め吳る丶侍女等に依りて、多少の氣晴をするとは出來ますれども、智育、德育、躰育兼備の泰西的敎育などは、此の令孃等の頭腦に考へ付きもせざるとにて、堂々たる內閣大臣の令孃にてありながら、僅かに自宅に敎師を聘して、三字經、百家姓、千字文、千家詩、幼學、女四書、女孝經の素讀を學ぶ位のとです、日々學んで得る處は順從、卑屈、柔弱、因循の外は何にもありません、若し此の令孃達に、男女同權の說でも聞かしたら、目を丸くして、氣狂になるでしやう、

結婚時代

「鬼も十八、晩茶も出花」で、如何が程、箱入りにして、育て上げたる、支那の娘も、年頃になれば、浮世の事も覺へ初めて、所謂結婚沙汰も段々出るのです、扨て、如何して、兩親は箱入り娘を結婚致さしむるかと、申しますれば、支那は支那丈け、其の組織は完全に備りて居るのです、北京の如きは大抵一ヶ月三四日乃至四五日も諸佛閣の緣日がありて、貴賤貧富、老若男女の別なく、之れに參詣致します、東京の緣日は大抵夜と限りて居る樣ですが、支那の緣日は悉く晝です、大抵日暮には終るのです、此の日は普通中等以上の參詣人は皆な麁末なる荷車樣の車馬を馳りて寺の門前迄參りますけれども、寺の門內には一切車の入るを禁じて居りますれば如何なる高貴の令孃にても、侍女に手を引かれて、門內に入り、見世物、茶屋、乾店、等を見廻る樣に致してありますから、何處の箱入り孃も此の日は正躰を表はさゞるを得んのです此の日こそ、果報者等が終生の好伴侶を見初むる吉日でありまして、未婚の男子と女子が、盛裝して、右を見、左に向ふて、ゾロ／＼步行する樣は隨分外國人なる私共には面白くもあれば、馬鹿／＼しくもあるのです、當時未婚者の服裝は、家の貧富、位の貴賤に依りて勿論差異はあり

ますれども、出來得る丈けは、華かなるものを纒ふて、髪は男子同様辮髪に組んで居ります、正直に申せば、私は十七八歳の支那婦人は、美妙の化身かと思ひます、日本の京女如何に美なりと雖も、年頃の支那婦人には到底及びません、其の優美なる點に於て、其の温和なる點に於て、其の無邪氣なる點に於て、併し支那婦人の優美、温和、無邪氣なるは、精神不活潑、肉躰不健全、元氣消磨の致す處なりとの説なれば反對は出來ません

兎も角も、神社佛閣の門内にて支那の新郎新婦は見合をするのです、之れより結婚の儀式は中々興味あり、又た有益なるともありますれども之れは別に題を更めて御話を致しましよう、兎に角、初め縁日にて見初め、仲間人を設けて、正式に談判を爲し、箱入り娘は一變して花嫁と成るものと思召せば、其れで宜しひのです、

主婦時代

花嫁になればとて支那の婦人は直ちに主婦となり、自ら一家を齊ふるとは出來ない、人は日本の舅姑が、世話を焼き過ぐると申しますれども、支那の舅姑は中々日本の舅姑處ではありません、一から十迄、新郎新婦の意見の行はれるとは殆んど無ひのです、新郎は男のとなれば、まだしもですけれども花嫁の苦心は隨分察するに餘りあるのです、當時支那婦人の最大目的は、單に舅姑に孝養を盡し、夫に貞節を守るにあるのです、殊に私の支那婦人を憫むとは、一夫多妻の制度です、支那の有名なる人物は正妻を二人乃至三人、妾を四人乃至五人有せざるものは殆んど無いのです、而して此の七八人の女性は一人の男子を中心として同居するものさへあるのです、主婦たるもの丶苦心悲境は察するに餘りあります

社會に於ける勢力

固より幾多の例外はありましよう、幾多反對の顯象はありましよう、併し一般支那婦人の情態は前陳の如きものです、然れば支那婦人の社界に於ける勢力などは全く悉無です、支那では婦人は人間として、取扱はれて居らないのです、之を思ひ、彼れを思へば、今日支那の衰頽は其の一大原因を此處に發見しなければならないのです、斯く迄無學無識なる內に依りて、育てられたる男兒が英雄豪傑となり能はざるも無理はないのです、思へば日本の御婦人は幸福の地位に居らるゝのです、諸君は進歩主義を有する父母を持ち兄弟を持ち、學ぶに學校あり、信ずるに宗敎あり、之れにても尙ほ日本將來の國民を健全に養成する能はずんば諸君の罪や決して輕からずです、

文から集

俳諧堂主人

先頃身まかりたまひたる雲外吉野泰三翁は北多摩郡三鷹村野崎の人にして醫を業とし尤も小兒科にくわし初め自由黨に屬せしも去りて國民協會に加盟しやゝ盡す處のありしも近頃に至りて柏田盛文氏等の人々と同時に脫會し當さに進歩黨に入るべしと期せし心の合期せず享年五十有六悲しきかな玆に不歸の客とはなりぬ余に於ては生前の知己大々的の恩人なり性甚だ書畫刀劍を愛し珍藏百を以て數ふべし就中古來名人大家の手簡或は史壇の考證たるべく又は文學の資料たるべき殆んど其數を知らず令息泰之助氏に乞ふて其內の家庭に關するものゝみを寫し取り文から集と名づけ逐號諸子に紹介す

其一

水戸烈公か家臣に送りしもの

秋冷の處其地子供等緣の間にも無障一段のことに候去る二十七日は余四麿ことゝ大町神勢館に行候よし是よりは歩行又は乘馬にて度々行候がよろしく候兎角子供は歩行致候がよろしく朝も未明より起き水にて顔をあらひ薄着にて庭などへ出て子供相應いたづら致候がよろしく候風ひき候はゞ其節はあたゝまり候がよろしく風を引き可申などとて用心致させ候は以ての外に候兎角武士の子は手強く手荒く成長いたし不申候ては追々成長の上公家や町人出家などの樣になり行天下の御爲を致し候樣に不相成故何分にも手强くからだを幼年よりきたへて育て候樣致度文武共に出精に被致候が宜敷文武をはけませそれにて死に候ほどの子は不惜候へば死候ても不苦候他へ養子につかはし候ても柔弱にて文武無之者にては水戸家の外聞よろしからず死候は誰にても一度は死候故外聞よろしからざる子供等は成長致候より死候方はるかに勝り申候故表つきつきの者幷に伊勢等へも此由申きけ候て前文の通り手荒く仕立文武を勵ませ可申候奥にても附々の者聞き候て讀書のさらへ等はよく〳〵致させ可申候書は文武稽古の間々前文申ごとく神勢館又は好文亭等へ歩行致候がよろしく又相手などゝシナイ打いたし候がよろしく候子供の大人の如くに致居候は身のこなれあしく不宜候如才は有之間敷候へどもついでにまかせ申遣し候牛乳は人乳をやめ候程の子は何れが用ゐ候てもよろしく毎朝取たての乳をのませ可申候一人にて五勺か一合ものみ候へは足り可申候是は松延本間等へ申談候がよろしく一橋より今以て日々とりに參り二合つゝつかはし申候何よりも牛乳にこし候藥は無之と存候也

倘々余四曆初の毎朝の水は只今にてもあび候事
と存候もしあひ不申候はゝあひせ可申候さるか
はり湯はつかはせ申ましく候

九月初四日　よし田へ

料紙は奉書の半切にして長さ殆んど三尺餘手蹟はかすれ勝にして雲煙の如し讀みさり讀み來ればスパルタ流盲見法一字一言紙に聲あり銀髪雪の如く烈公の風采左右にせまる思ひありその追々成長の上公家や町人出家などの様になり行き云々といふに至りては氣焔萬丈何等の快ぞや沈思全文を翫味せば日本武士道の奥儀も或は是によりて解し得んか

其　二

會津の滞士より宮川家に送りしもの

いまた貴意を得す候へとも秋冷之節いよ／＼御
安全に入らせられ珍重に奉存候扨者近藤氏御親
父御大病の由にて急速東下候様御申こされ候處
當表此節の形勢追々御傳聞被成候はん實に治亂
安危の際身命をいたすの秋に御座候且此間芹澤
義病死致五拾人餘烏合の浪士近藤氏一人の總括
にてやう／＼取締罷在候處此節東下にては分崩
離散の姿に相成一日片時も相離候儀は六ケ敷次
第に御座候間親子の御情實においては御察申入
候儀御座候へとも當地の摸様鎮静に赴き候まで
何分まかり下り候儀不相成候間其邊不悪御承知
被下何卒當人に御なりかはられ如何様にも御看
病の程私共において御願申述候以上

九月廿三日　廣澤富次郎
大野英馬
宮川乙五郎様

料紙は前の如く奉書の半切にして手蹟甚だ見事なりこは是近藤勇が父病氣の故を以て生前に今一度あひたしとて愛子近藤勇の東下を催がせしも當時の形勢は近藤

勇の京都を去るを許さず其由を勇にかはりてつけ來りたるもの余が先きにものせし近藤勇についての記事とあはせ見れば解する所いよ〱深かるべし

其三

發句師一茶坊旅中より家に送りしもの

三月三日頃は歸郷仕候に付火の用心第一に御たのみ申入候私かへり候までに味噌仕込なさるべく候たゞし豆は多助どの方よりなりともいづかたよりなりとも取りて御仕こみなさるべく候おそくても節句後には早々歸り可申候右のおもむき御せうち下さるべく候かしく

二月廿三日　一茶

おきくどの

一茶は信州の人にして近世俳壇の名家なり尤も滑稽の句にとむたとへば

やせ蛙まけるな一茶これにあり

ふんどしに笛つきさして夏の月

など數へ來ればいとも多し其自畫自賛の句に

ひいき目にみてさへ寒き姿かな

とあるなど誠に面白き所なり洒々落々の一茶坊いづくんぞ知らん火の用心よりみその事まで注意の屆く人ならんとは、料は鼠色の半切なり

次號には屋代弘賢、賴山陽、北村季吟、などのものをかゝぐべし

すゞみ臺

◎むかし支那宋の代の崇寧年中に李時雍といふ人あり、尤も書道に達し、盛名米芾と相ならび、官書畫博士に任ぜらる、或時勅命を蒙むり、禁中に於て踦鰲の二大字を書す、誠に筆に神あるが如く一點一畫其妙を極ざるなし、折しも君の左右にありて是をながめ居たる人々はいづれも感に堪えで或は手を拍つあり又は聲

を揚ぐるあり、其樣尊き御前を忘れ果てたるもの丶如し、物にはぢらひ勝なる宮女さへも進み出で各々花にて造りたる簪を李時雍が頭にさして其妙を賞するま丶に、簪の數積りて雪を頂だける李時雍が頭に美しき紅なゐの色滿々たり、此事ありてより以來李時雍が名はいよ／＼高く遂に米芾を凌ぐに至れり、されば帝の御寵愛も日增に篤く、斯る名人の書の外國へ出なんことゝこそ本意ならずとて、桃色の絹を以て帝御自身李時雍が臂に封をつけられ、勅命是を許すにあらざれば、決して書を寫すべからずと命じたまふ、是御留筆といふ事の嚆矢なり。

◎能書筆を撰はずとは、もと歐陽詢は紙筆を撰ばずして書皆こゝろざしの如しといふことのあるによりていひ出したるものにして、かゝる處は唯詢一人の評にとゞまり、總ての能書筆を撰ばざるといふにはあらず、諸子の知る趙子昂も紙筆もし意に叶はざれば能書といへども是を能せず、たとへば快馬泥濘の中を行がごとしと書論に記し、又明の代の名手周顯宗も亦能書筆を撰ばずとは、通論にあらずと書て殘せり、衛夫人は崇山の兎の毛にて造りし筆にあらざればこれを用ゐず、王羲之は鼠の鬚の筆を撰び、歐陽通は狸毛を象牙の管にすげたるものを愛せし由、古來名人の心を用ふる斯の如し、道に志さんもの、誰もかくこそあらまほしけれ。

◎洋の東西に論なく、苟も世に偉とせらるゝ程の人の傳記をものする作者どもは、いづれも皆唯々其人の凡人ならぬことをのべて、初よりそを偉とせんと志ざし、頻に怪き事をかく、就中其誕生の日に於て、或は紫雲たなびきとか、又は異香薫じとか、出鱈目の法螺を並べたること誠に可咲ことゝやいはん、近頃或書に於て孔子誕生の日の有樣を讀めり、一斑は史記の世家をはじめ二三の書にあれども、斯までに詳らかならず、即

ち譯して諸子にかたる、
孔子まさに生れんとせる夜中ごろ、晴れ渡る空より二むれの雲降り來るものあり、近づくまゝによくよく見ればこれぞ雌雄二つの蒼龍にして、產屋の屋根にとまると見えしが、頓て窓より入りて產床の前後をまもる、產のひも事なく解て幼子呱々の聲を揚げしや倏ち二人の神女天より下り來り香露とて香よき溫湯を以てあらひたりとぞ、

◎昔支那の或片田舍に呉叔といへる男あり、性質懶惰にして何のなすところもなく終日八方に遊び暮せり、さればそが兩親もいたくこれを憂ひ百方言を盡して誡しむれども更に用ひず、却つて其懇切なる誡をいとも〳〵五月蠅ことに思なし家をいで、遂に歸らず、たれかれの家に寄食して其日々々を僅かに送れり、朋友の人々も初ほどはよかりしが、度重なればいづれも遂にうとんじ果てゝ食時來る事あるも膳を設けず、されば食にも苦しみて如何ともすること能はず、されども生れ得たる懶惰の性質は猶もつて働かんとも思たゝず、如何にもして遊んで暮すべき道を求めん種々樣々と苦心の末、雲を食ひ霞を吸ふ仙人こそ無氣樂なるべしとて、爰に仙人たらん願ひを起し、深山に入りて漸やく或仙人に逢ひ今日唯今より其弟子たらんことを求む、其時に仙人は呉叔にむかへて曰く、汝さる願を起して今玆に來る父母はこれを許せしかいかに、否とよ父母こそは却つて忌みたまふなり、されども我はあくまでも仙人たらんの素願、父母にかへても思ひとゞまるべきにあらずと答ふ、仙人から〳〵とうち笑ひ、汝程物の理を解せざる男はあらず、仙人は人間より位一つ上にあり、されば仙人の最下等なるものと、人間の最上等なるものと、殆んど一なり、然らば汝の如き人間の最下等なるものいかで一足飛に仙人たるべき、もし飽までも仙人たらんと欲しなば暫くは里にかへりてよく

飭らき人間のすべき事は殘らず、なし遂げ先づ第一に最上等の人間となるべし、是ぞ即はち仙人となる緒口なりと聞き終つて彼男大ひに悟り、家にかへつて勉め勵み遂に立派なる男になりしと、いと面白き話しなり。

◎死んでから佛にならるはいらぬこと、いきたる内によき人となれ、といへる狂歌あり、一休和尚の作とか聞けり、上述仙人の話しと較べ見るべし。

◎近松門左衛門が名は今は知らざる人もなし、生涯の著作いづれも皆日本の名を高からしむに足るものなり、殊に其世話ものに至りては誠に一字千金とこそたゝゆべし、其堀川波の皷の如き、我等後進の日夜誦讀して措かざる處、中の卷の内に一段の金言あり、婦女子家庭の戒にもとそのまゝ寫して、左に錄す、

おいとしや母樣の、御臨終の二日前兩人を枕の右左、御遺言の御詞を、よもや忘れはなさるまい、其方等二人は幼さいから、女子の道を敎へこみ、讀書縫針糸綿の、道もそれでは耻からず、第一女子の嗜は殿御もつてが大事ぞや、舅は親ぞ小舅は兄よ姉よと孝をなせ、外の男とさしむかひ、顔をもあけで見ぬものぞや、惣じて夫の留守の中、男とあらば召使、一門他人おしなべて年寄若いのへだてなく、此嗜が悪ければ、四書五經をそらでよむ、女子でも役にたゝぬぞや、此遺言をそち達が論語と思ふて忘るゝなどの、御詞が骨に志み、きもに殘つて得忘れぬ、姉は父御のそんをつぎ後紐から酒をのむ、藤よ母になりかはり異見をせよと其跡は、早息切のやつれ顔身につき添ふて忘られず、朝夕位牌にむかふたび、此遺言を御經と思ひ、一遍づゝは繰て見る。

讀み去り讀み來れば文章の綾といひ、内容の實といひ、誠に論語とも思ふて服すべきに足る。

歌苑

磯邊千波撰

。夕立　　丹波　山家松亭
大空はかき曇りつゝいかづちの轟くやかて夕立のふる
。同　　石狩　阿部まさこ
夕立の過行庭の木立よりつゆをこぼして風わたるなり
同　　波靜廼舍
夕立のふる音しけく聞ゆなり庭しろたえの軒の玉みつ
晴れ渡る空忽ちにかきくもり只た時の間に濁るかは水
同　　薩摩　本田まつ
鳴神の音もをやみて時の間に月かけ見えゆて夕立の空
鳴神の音にすきゆく夕立に心しも身もいきかへりけり
、、同　　名古屋　此花庵主人
夕立に村の小川の水ましぬいさ見つれて魚やあさらん
。。古寺　　大阪　山田多七
朽のこる軒端の松のさかり苔年ふる寺の印なるらん
おもしろし
。同　　信濃　松林蝶友
山深み苔むす寺に法の道たどれと呼ふか松かぜのこゑ
、。同　　越後　坂口信正
白雲のゆきかふ峯の古寺にあるしかほにもすめる月哉
、。同　　京都　中村傳三郎
木の間もる鐘の響をたよりにていそけと遠し峯の古寺

まぼろし

堀内心愛子

ゑみのむかし　そのかみのこと
いとけなき　志のぶれば　いともなつかし
香をこめし　かすみたつれば
おもふとち　袖ほわはへて
野べ山べ　あくがれあるき
すみれつみ　つばなぬきつゝ
ながき日を　こゝろもそらに
はなうつり　青葉露けき
いけのべに　ほたるをゝと
志げる木の　かげにながるゝ
いときよき　水をむすびつ
あそびけるわれ
なみだのむかし
見しやゆめ　ありしやうつゝ
すぎし世を　思へばかなし
月とも　すみわたれども
すみかぬる　こゝろのくもり
草の根に　なにかなしきか
なくむしの　こゑにさそはれ
いとゞます　こゝろのおもひ。
木の葉ちる　岩間の水の
氷しも　はる來ればけぬ
とけがたき　おもひのつらさ
ふるゆきの　つもるうれいに
かなしみしわれ

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　吉崎圓吉
編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

錦織竹香女著

普通裁縫書

挿圖二百五十餘
全三冊
製本最美麗

正價金六十五錢
郵稅金八錢

本書は著者が數十年來師範學校及附屬小學校にて裁縫科を敎授したる經驗と今度熊本香川大坂京都滋賀の各府縣を巡視したる研究とによりて最も親切に編纂せられたるものにして前編後編及附錄の三冊に分ち前編には敎授術を主とし裁縫用具の名稱用法より裁縫敎授上必要なる事項を記し後編には各種の運針法により精密なる圖解を加へ襦袢單衣袷綿入帶羽織袴等の積方裁方縫方等の各項に分ちて詳說し附錄には各種の縫方より前垂風呂敷其他頭巾足具夜具の類積方裁方及參考となるべき必要なる裁縫法を加へられ凡そ裁縫の道に於て心得ふべきものは盡く網羅して漏す事無く裁縫の書世間にあるもの數十種中本書の如く懇切詳密に解說したるものは實に無し殊に其文章は平易にして小學の兒女にも讀み得べく裁縫敎師の參考とすべきは素より裁縫に心ある兒女は本書に就きて學ばゞ良師に學ぶと異ならざるべし

發兌 東京市神田區通新石町 同文館

關西販賣 大坂東區備後町四 吉岡平助

德富猪一郎著
第九版 新日本之青年
定價二十錢 郵稅四錢

湖處子宮崎八百吉著
第十六版 歸省
定價十五錢 郵稅四錢

乾坤一布衣著
最暗黑之東京
定價十三錢 郵稅二錢

ヴヰクトル、ユーゴー著 森田思軒譯
懷舊
定價二十錢 郵稅四錢

再版 平田久著

露西亞帝國

定價卅五錢 郵稅六錢

攻究すべき時期に著されたる本書は、今や更らに最も攻究すべき必要を以て讀まるべくなれり。今日の形勢を看よ。露西亞を知らざる可らざるは我國民上下一般の特勢なりと知らずや。

發兌元 東京市京橋區日吉町 民友社

明治廿五年九月十四日遞信省認可
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行